

看護実践を詠んだ短歌を用いた授業による学生の学び

近藤 真紀子^{1)*}, 安田 壽賀子²⁾, 細原 正子¹⁾, 内海 知子¹⁾, 岩本 真紀¹⁾¹⁾ 香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科, ²⁾ 香川大学医学部附属病院

What Nursing Students Can Learn through Tanka That Describe the Nursing Experience

Makiko Kondo^{1)*}, Sugako Yasuda²⁾, Masako Hosohara¹⁾
Tomoko Utsumi¹⁾, Maki Iwamoto¹⁾¹⁾ Department of nursing, Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural University of Health Sciences²⁾ Department of Nursing, Kagawa University Hospital

要旨

目的：看護実践を詠んだ短歌を用いた授業による学生の学びを明らかにする。

方法：成人看護学総論を受講する大学1年生を対象に、短歌を用いた授業を実施し、授業後の学生レポートを質的帰納的に分析した。授業では、看護実践を詠んだ短歌を、歌人であるエキスパートナース自らが解説紹介した。

結果：学生は、【熟練看護師の経験の重みを伝える短歌のリアリティー】により、【自分の立場に置き替えて患者・ナースの心情を慮る】と共に【医療事故の怖さを知った】。それによって、【看護という仕事の本質】【看護という仕事の過酷さ】【看護という仕事の持つ誇り】に気付き、【看護師になり働き続けるために必要なこと】【看護師として大切にしたいこと】について熟考していた。この過程は、医療の場の現実を自分のこととしてイメージする、看護という仕事の本質を理解する、自分に何ができるのか考える、の3つのコアカテゴリーで説明できた。

考察：看護実践を詠んだ短歌には、①臨床現場のリアリティーを鮮明にイメージさせる力、②看護の本質を感覚的・直観的に伝える力、③自己の感情を表現し客観視することによるカタルシス効果が期待でき、看護基礎教育における教授方法として有用である。また、成人看護学の学習効果としては、①スピリチュアルペインの理解、②感情労働としての看護の理解、③学習者としての自覚と看護職者になる覚悟の促進、が期待できる。

Key Words: 短歌 (tanka), 教授方法 (teaching method), 初学者 (learner), 成人看護学 (adult nursing), 学び (learning experience)

* 連絡先：〒761-0123 香川県高松市牟礼町原 281-1 香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科 近藤 真紀子

* Correspondence to: Makiko Kondo, Department of nursing, Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural University of Health Sciences, 281-1 Murecho-hara, Takamatsu, Kagawa 761-0123 Japan

はじめに

成人看護学は、人間のライフサイクルから見た成人期にある人の特徴を理解し、健康レベルに対応した看護実践を学ぶことを目的とする。健康レベルに対応した看護には、健康生活を育む看護、健康生活の急激な破綻からの回復を促す看護、健康生活の慢性的な揺らぎの再調整を促す看護、障害を持ちながらの生活とリハビリテーション、人生の最期の時を支える看護が含まれる¹⁾。健康レベルに応じた看護実践を理解するためには、各健康レベルの特徴を理解した上で、対象を、身体的・精神的・社会的・霊的側面から理解する必要がある。

学生の学習効果を高めるためには、レディネスの3要素である、成熟・過去の学習体験・教授方法を考慮して、授業展開する必要がある²⁾。成人看護学総論は、基礎看護学に続く基盤的な科目として、低学年に配置されることが多い。そのため、受講者は、臨地実習を全く経験していない場合や、基礎看護学の一部しか専門科目を学んでいない場合があり、成熟・過去の学習体験は十分とは言えず、看護学の初学者としての特性をもつ。臨床の場を全く知らない初学者が、成人看護学の諸理論と健康レベルの応じた看護実践を学ぶためには、病いを持つ人のあり様と看護実践の実際を、鮮明にイメージできるような教授方法の検討が必要である。

成人看護学における対象理解に関する教授方法の検討では、学習効果を高めるための試みとして、闘病記の活用³⁻⁵⁾、患者自身による病気体験の語り⁶⁻¹⁰⁾、模擬患者(SP; Simulated Patient)参加型授業¹¹⁻¹⁴⁾、Story-Case Learning¹⁵⁾、身体障害の疑似体験^{16, 17)}、ロールプレイング^{18, 19)}、学生自身がペーパーペイシエントを作成²⁰⁾、遺言状の作成²¹⁾、学外演習による地域住民とのふれあい²²⁾などがある。これらの試みは、対象者の苦痛・苦悩について共感理解を深めることには効果がある。しかし、患者-看護師関係において、関係性がダイナミックに変化する様や、深い関わりに根ざすケア実践の中で、看護師が何を経験しているのかについて、学生の理解を促す教授方法は検討されていない。

短歌は、五・七・五・七・七の31文字に全てを凝集して表現する、日本古来の文学の一つであり、文脈性に富み、情景描写に優れている。エキスパートナースの看護実践を詠んだ短歌を、成人看護学の教材として活用することは、臨床看護の場の情景を生き生きとイメージさせることで看護実践を立体的に理解させ、感性を揺さぶりモチベーションを高める教授方法の一つとなると考える。

研究目的

看護実践を詠んだ短歌を教材として用いた授業を成人看護学総論に導入し、その授業による学生の学びを明ら

かにする。その結果を元に、看護基礎教育における、教授方法としての短歌導入の意義と可能性について、考察する。

方法

1. 用語の定義

「学習」とは、経験を通しての知識や技術の獲得であり、行動変容を可能にする知識・習慣・概念などを組織化・体系化・再構築することと定義される²³⁾。「学習」と「学び」は同義語であり、共に learning と訳されるが、「学び」の方が、learning の動名詞的で活動的なニュアンスを表現することができ、社会的文脈の重要性を含む²⁴⁾。本研究では、学生の主体性を重視する立場から、「学び」を、「学生がある経験を通して、主体的に知識や技術を獲得

表1 成人看護学総論の授業計画

授業の目的	成人各期にある人々の特徴について学び、多様な健康問題に対する成人看護の役割と機能について理解する。
授業の目標	①成人期にある対象の特徴と健康問題を理解する ②成人保健の動向及び生活習慣病予防における看護の役割を理解する ③成人の看護に有用な概念について理解する ④健康レベルに対応した看護の概要について理解する
授業の進め方	成人期にある人々の特徴、健康問題、及びケアの概要が具体的にイメージできるように、講義・グループワーク・ビデオ視聴・特別講義などを組み合わせて、授業を進行する。
授業スケジュール	成人期にある対象の理解 (1～3回) 1) ライフサイクルからみた成人期 2) 成人期にある人の特徴 3) 成人各期の健康問題と課題 成人保健 (4～6回) 1) 成人保健の動向 2) 生活習慣病の予防 特別講義 (7回) テーマ：看護師という人生を短歌とともに歩む 講師：安田壽賀子 成人の看護に有用な概念 (8～9回) 健康レベルに対応した看護 (10～14回) 1) 健康生活をはぐくむ看護 2) 健康生活の急激な破綻からの回復を促す看護 3) 健康生活の慢性的な揺らぎの再調整を促す看護 4) 障害をもちながらの生活とリハビリテーション 5) 人生の最期のときを支える看護 まとめ (15回)

し、行動変容を可能にする知識や概念を、体系化・再構築化すること」と定義する。

2. 研究参加者

成人看護学総論の受講生の内、研究参加に同意の得られた者。

3. 教育的介入

1) カリキュラムから見た成人看護学の位置づけ

研究対象となった公立大学のカリキュラムにおいて、成人看護学は、成人看護学総論（1年後期，1単位），健康レベルの各期に応じた看護（2年通年，5単位），成人看護学実習（3年次，6単位）で構成する。

カリキュラム全体における科目の配置は、看護実践能力の成長発達の視点から、先に臨地実習の時期が決められ、その実習目的・目標に合わせて科目を配置している。成人看護学総論は、1年次後期という比較的早期に配置される。これは、基礎看護学実習（1年後期・2年後期，各2単位）を、総合病院の内科系・外科系病棟で実施することから、対象及び臨床看護の場の特性についての学生の理解を促す意図がある。

看護実践を詠んだ短歌を用いた授業は、成人看護学総論に導入した。成人看護学総論の授業内容を表1に示す。

2) 看護実践を詠んだ短歌を導入した授業展開

授業は、短歌の作者が担当し、時間数は1コマ（90分）、講義日程は平成21年11月下旬とした。授業では、看護師長でもある歌人が、自身の短歌集²⁵⁾より、9の枠組みに沿って、89首の短歌を選出し、各々の短歌について、その短歌に描かれた状況、短歌に込められた思いなどを語った。9の枠組み及び含まれる短歌数は、‘患者とともに（17首）’‘ジレンマと悩みと（14首）’‘医療事故を恐れる（3首）’‘スタッフとともに（8首）’‘安らぎを（13首）’‘患者として（8首）’‘ひたすらに（8首）’‘小児病棟（11首）’‘ブルネイ・ダルサラームへ（7首）’であった。短歌の選定には専任教員は関与せず、歌人に一任した。歌人は、看護師あるいは一人の人間として、心揺らぎつつも自己確認しながら進んでいく自己の姿を学生に伝える視点から、短歌を選定した。

4. 調査方法

短歌を用いた授業を聴講して、①学んだこと、②感想、についての自由記載を求め、授業の1週間後を提出期限とした。

5. 分析方法

学生の記載したレポート内容は、個別の短歌を挙げて学びを記載しているもの、9の枠組みに沿って学びを記載しているもの、授業全体の学びを記載しているものがあつた。そこで、分析の視点は、①学生はどのような短歌に感銘を受けたのか（感銘を受けた短歌選）、②授業全体を通してどのような学びを得たのか（看護実践を詠んだ短歌を用いた授業からの学び）の2点とした。

1) 感銘を受けた短歌選

①学生の記載したレポートの全内容から、個別の短歌

について記載している部分を抜き出す。②個別の短歌毎に、①で抜き出した記述内容を整理し、各々の短歌を選択した学生数をカウントする。

2) 看護実践を詠んだ短歌を用いた授業からの学び

ストラウス&コービン²⁶⁾のグラウンデッド・セオリー・アプローチで示された分析方法の内、オープンコーディングと軸足コーディングの手法を参考に、以下の分析を行った。①分析の視点が、「看護実践を詠んだ短歌を用いた授業を通して、学生は何を学んでいるのか」であることを明確する。②学生の記載したレポートを熟読する。③授業を通しての学びを記載している部分を抜き出し、1文に1意味が含まれるよう表現し、コードとする。④類似するコードをまとめてその意味を忠実に表現し、概念とする。⑤概念間の関連性に基づいて、サブカテゴリーを形成する。⑥サブカテゴリー間の関連性に基づいて、カテゴリーを形成する。⑦カテゴリー間の関係を図式化し、コアカテゴリーを形成する。⑧カテゴリー・コアカテゴリーを用いて、ストーリーラインを記述する。⑨以上のプロセスは、同時並行で行う。

6. 倫理的配慮

研究の主旨、研究参加は自由意志に基づき秘密は厳守されることなどを、文書と口頭で説明し、研究へのレポートの使用について、同意を得た。特に、現在及び将来に亘り、授業及びその他の学生生活において、研究参加への同意・不同意は一切影響せず、教員としての関わりは、全ての学生に平等であることを約束した。同意の得られなかった者のレポートは分析から削除した。本学研究倫理等委員会による承認を得た。

結 果

1. 研究参加者の概要

研究参加者は、成人看護学を受講した公立大学1年生70名の内、研究参加に同意の得られた63名（90%）であり、男性9名、女性54名が含まれた。

2. 短歌導入による学生の学び

学生の記載したレポートは、1名につきA4判2枚〜3枚程度であり、総数194ページであった。

1) 感銘を受けた短歌選

感銘を受けた短歌を具体的に挙げて学びや気づきを記載していた学生は38名であった。選択された短歌は、総計41首であり、詳細は表2に示す。9の枠組み別の短歌選の内訳は、表3に示す。

2) 看護実践を詠んだ短歌を用いた授業からの学び

短歌導入による学生の学びの過程は、医療場の現実を自分のこととしてイメージすることによって、看護という仕事の本質を理解し、そして、自分に何ができるか考えるというものであつた。詳細は、図1に示す。以下、コアカテゴリーは斜体、カテゴリーは【 】、サブカテゴリーは《 》、下位カテゴリーは〈 〉で示す。

表2 学生が感銘を受けた短歌選

	学生が選択した短歌	枠組み	選択した学生数 (人)
#1	がんばれといふ医師の言葉に 10歳のころゆっくりつぶされてゆく	小児病棟	20
#2	ナースコールに急ぎ来たれば目を開きぼつりと言へり「死ぬときはいつ？」	患者と共に	19
#3	車椅子に乗りたる人と押すわれと無言のままエレベーター待つ	患者と共に	13
#4	午後九時の消灯告ぐるオルゴール響きて病舎の夜が始まる	患者と共に	12
#5	告知せぬままに迎ふる終末を支へむ言葉いくつを選ぶ	患者と共に	11
#6	患者より労られまた励まされ育ちゆくべし新人ナース	スタッフとともに	9
#7	声にならぬくちびるが言ふ「ありがたう」ひたに見つめて涙あふるる	患者と共に	8
#8	病む人のかたへに過ぎてゆくからに時間の重さといふを思へり	患者と共に	7
#9	高飛車にもいふ医師のひとりならずチーム医療に遠くわがをり	ジレンマと悩みと	6
#10	ひたすらに奇跡起これと祈りある集中治療室生死の狭間	患者と共に	5
#11	病床稼働率平均在院日数値にて示されてあるわが看護とは	ジレンマと悩みと	5
#12	あかあかと光照らせる夜のプール泳ぎ続ける自虐のごとく	ジレンマと悩みと	5
#13	おだやかな顔に逝きたる身をぬぐふ検査も治療も望まざりにき	患者と共に	4
#14	倍量のビタミン剤を飲みながら撒とばしをり組織のなかに	ジレンマと悩みと	4
#15	看護師には向かぬといひて落としたる涙がゆつくり膝に広がる	スタッフとともに	4
#16	一杯のモカコーヒーにひとときをゆるゆる過ごす白衣を脱ぎて	安らぎを	4
#17	救ひ得ぬいのち嘆きし若き日の看護師われを思ひ出づる日	ひたすらに	4
#18	「かんごしになれますように」と願ひたる短冊吊るさる小児病棟	小児病棟	4
#19	一枚の布に隔たれ死者とわれ午後の廊下を黙し行くなり	患者と共に	3
#20	職辞して嫁ぐナースにひとつぶの種子蒔くごとき別れと告ぐる	スタッフとともに	3
#21	教育は優劣のかなたといふ語り聞きをり若きナースら思ひて	スタッフとともに	3
#22	手術また麻酔を受くる承諾書サインをしつつ手のふるへる	患者として	3
#23	夜の更けを覚めればまぶしく灯のともるナースステーションに動く人影	患者として	3
#24	「天職」とナイチンゲールの言ひましきナースのひとりとなりて働く	ひたすらに	3
#25	病名を知りてベッドに泣きじやくる少女のころわが抱き止めむ	小児病棟	3
#26	病む人をいかに癒さむクローン技術遺伝子治療進化しゆくに	患者と共に	2
#27	動かざる腕を庇ひて生きゆかむひとりの中国女性を思ふ	患者と共に	2
#28	千メートルけふのノルマをひたすらに泳ぐわたしが無になるやうに	安らぎを	2
#29	じぶじぶと帯状疱疹ウイルスは侵しゆくらしわが神経を	患者として	2
#30	わが背にその身預けて眠る子の未来よ無限にあれと念じつ	小児病棟	2
#31	おぼつかなき歩みなれども退院の拍手起こりぬナースステーションに	小児病棟	2
#32	あわただしく白衣纏ひて更衣室出づればナースとなりゆくわれは	ジレンマと悩みと	1
#33	患者の権利擁護するとふ理念持つわれらに重し数値目標	ジレンマと悩みと	1
#34	コンビニのおでん分け合ひ年を越す心拍監視の音を聞きつつ	スタッフとともに	1
#35	フルートに委ねるころ六月の窓を開いて《プレリュード》吹く	安らぎを	1
#36	青空の下にオカリナ吹きをれば風に光に紛るるやうな	安らぎを	1
#37	明け方の身を刺す痛みうつつとも夢とも思ふ声の漏れ出づ	患者として	1
#38	「本質を見失ふな」と声高になりゆく患者カンファレンスに	ひたすらに	1
#39	看護の力示すと気負ふこの幾日輪郭きりりと口紅を引く	ひたすらに	1
#40	主張することば持たざる子どもらの権利守らむわが日常に	小児病棟	1
#41	ブルネイの友に送らむEメール終りはいつも大文字の「LOVE」	ブルネイ・ダルサラームへ	1

学生は、【熟練看護師の経験の重みを伝える短歌のリアリティー】によって、【自分の立場に置き替えて患者・ナースの心情を慮る】と共に、【医療事故の怖さを知る】に至った（医療の場の現実を自分のこととしてイメージす

る）。それによって、【看護という仕事の本質】を理解し、看護という仕事の相反する2つの性質、つまり【看護という仕事の過酷さ】と【看護という仕事の持つ誇り】が含まれることに気付いた（看護という仕事の本質を理解す

表3 学生が感銘を受けた短歌選（枠組み別）

枠組み	授業で紹介した短歌数(首)	学生が選出した短歌数(首)	枠組み別の選択率(%)
患者と共に	17	11	64.7
小児病棟	11	6	54.5
ジレンマと悩みと	14	6	42.9
スタッフと共に	8	5	62.5
安らぎを	13	4	30.8
患者として	8	4	50
ひたすらに	8	4	50
医療事故を恐れる	3	1	33.3
ブルネイ・ダルサラームへ	7	1	14.3
合計	89	42	47.2

る)。そして、自分自身に引き付けて考えることにより、【看護師になり働き続けるために必要なこと】【看護師として大切にしたいこと】について、考え及んでいた（自分に何ができるのか考える）。

（1）医療の場の現実を自分のこととしてイメージする

①【熟練看護師の経験の重みを伝える短歌のリアリティー】

これは、《熟練看護師の経験の重み》と《短歌の伝えるリアリティー》で構成され、講義全体を通して得られた。

《熟練看護師の語る経験の重み》は、講師の豊富な臨床経験から紡ぎだされた言葉の重みを示した。レポートの一例：「多くの患者の死に直面し、看護師としての経験を積んだ人の言葉の重さを感じた。自分たちが言ったのでは安っぽく聞こえるし、こんな言葉を紡ぐこともできない」

《短歌の伝えるリアリティー》は、短歌を聞くことで、現場の様子を臨場感をもってイメージできることを示した。レポートの一例：「短歌は、他人に伝える力は意外に大きいことに驚いた。実習経験のない自分でも、状況をイメージできた」「臨場感あふれていて、場面が目浮かんだ。こんな仕事をしているのだなあ、自分ならどうだろうと考えながら聞いた。」

②【自分の立場に置き替えて患者・ナースの心情を慮る】

これは、《患者の心情を慮る》《看護師の心情を慮る》《自分ならどうすればよいか分からない／自分の身と重なる》で構成され、主に「患者と共に（# 2・5・10 他）」「小児病棟（# 1 他）」、「スタッフと共に（# 15）」の短歌を通して得られた。

《患者の心情を慮る》には、〈死ぬ時はいつ？と問いかけた患者の気持ち〉〈これ以上頑張れないと言った子供の悲痛な思い〉〈子供が病気になることへの怒り〉が含まれ、短歌に描かれた患者・患児の気持ちを想像し推し量ることを示した。レポートの一例：「辛い治療に耐えに耐え抜いた子供から発せられた言葉が、もうこれ以上頑張れない

いというのは、あまりにも辛すぎる、涙が出そうだった」「死ぬ時はいつ？と語った患者は、きつと死期を悟っていたと思う。たぶん、涙を流さず淡々と言ったと思うが、どんな気持ちだったのだろう。確実に流れる時間を思いながら、死と向き合うために言ったのだろうか。」

《看護師の心情を慮る》には、〈死ぬ時はいつと問いかけられたナースの辛さ〉〈死を前にした患者に何もできないナースの辛さ〉が含まれ、短歌に描かれたエンドステージにある患者と関わるナースの心情を想像し推し量ることを示した。レポートの一例：「死ぬ時はいつ？と問われること程、看護師として辛いことはない。あまりにも悲しい歌。」「看護師の苦しみは、死を目の当たりにすることだけでなく、死を前にして苦しんでいる患者と共にいて、コミュニケーションもとれずに、励ますこともできない苦しみがあることを知った。」

《自分ならどうすればよいか分からない／自分の身と重なる》には、〈死ぬ時はいつ？と問いかけられた時自分の感情を抑えて関われるのか不安〉〈死を前に苦悩する患者にかけられる言葉が自分には見つからない〉〈自分には向かないと涙する新人ナースの姿が自分の未来と重なる〉〈自分の家族の死から目を背けた自分に看護ができるのか〉が含まれ、苦悩するナースの姿に自分の姿を重ね合わせ、自分には対応できない戸惑いや不安を示した。レポートの一例：「もし自分が死ぬ時はいつ？と聞かれたら、どうすればよいか分からず沈黙して泣いてしまいそう。コミュニケーションの苦手な自分に本当にできるのか？」「自分には看護師は向かないと言って泣く新人ナースの姿は、自分の将来の姿を見ているようで、辛くなった。」

③【医療事故の怖さを知る】

これは、〈ミスは絶対に許されない〉〈自分がミスを犯す怖さ〉で構成され、主に、「医療事故を恐れる」の短歌から得られた。これは、将来、自分も医療事故を起こす当事者となるかもしれない怖さを示した。レポートの一例：「ミスの原因を一週間以上かけて考えると聞き、それ程、ミスは許されないものだと思った。一步間違えれば、自分も、悪気はなくても加害者になるのかと思うと、怖くなった。」

（2）看護という仕事の本質を理解する

①【看護という仕事の本質】

これには、《医療者の常識とは異なる患者の真の思い》《看護は生老病死の苦しみにふれる仕事》《人間のいるところ必ず必要とされる仕事》《患者や仲間との相互作用の中で共に成長し合う仕事》で構成された。

《医療者の常識とは異なる患者の真の思い》には、〈励ましの言葉が病む人を追い詰める言葉の重み〉〈死を前にした人にとっての時間の重み〉〈医療の使命である救命が患者の真の希望に沿わないこともある〉〈手術の怖さは全てを知り尽くしたナースでさえも理解できない〉〈患者の視点から長い夜の意味に気付いていたか〉が含まれ、「小児病棟（# 1 他）」「患者と共に（# 2・4・8・13 他）」「患者として（# 22 他）」の短歌を通して得られ、

自分たち学生を含む医療者の常識が、必ずしも患者の真の願いに沿わないことに気付くことを示した。レポートの一例：「死と隣り合わせの人にとっての今は、とても大事な時間。私たちとは時間の重みが違う。時間は誰にも平等に与えられているが、重みはそれぞれ違う。自分は、この患者ほど、

時間を大事に生きていないように思う。」「何の検査も治療もせず、自分らしく生き抜いた患者のQOLは高かったと思う。ナースとしては命を救うことが最も大事だが、患者本人にとってはそれが必ずしも第一選択にはならないことを、忘れてはいけない。」『「オルゴール響きて病舎の夜が始まる』の歌が、

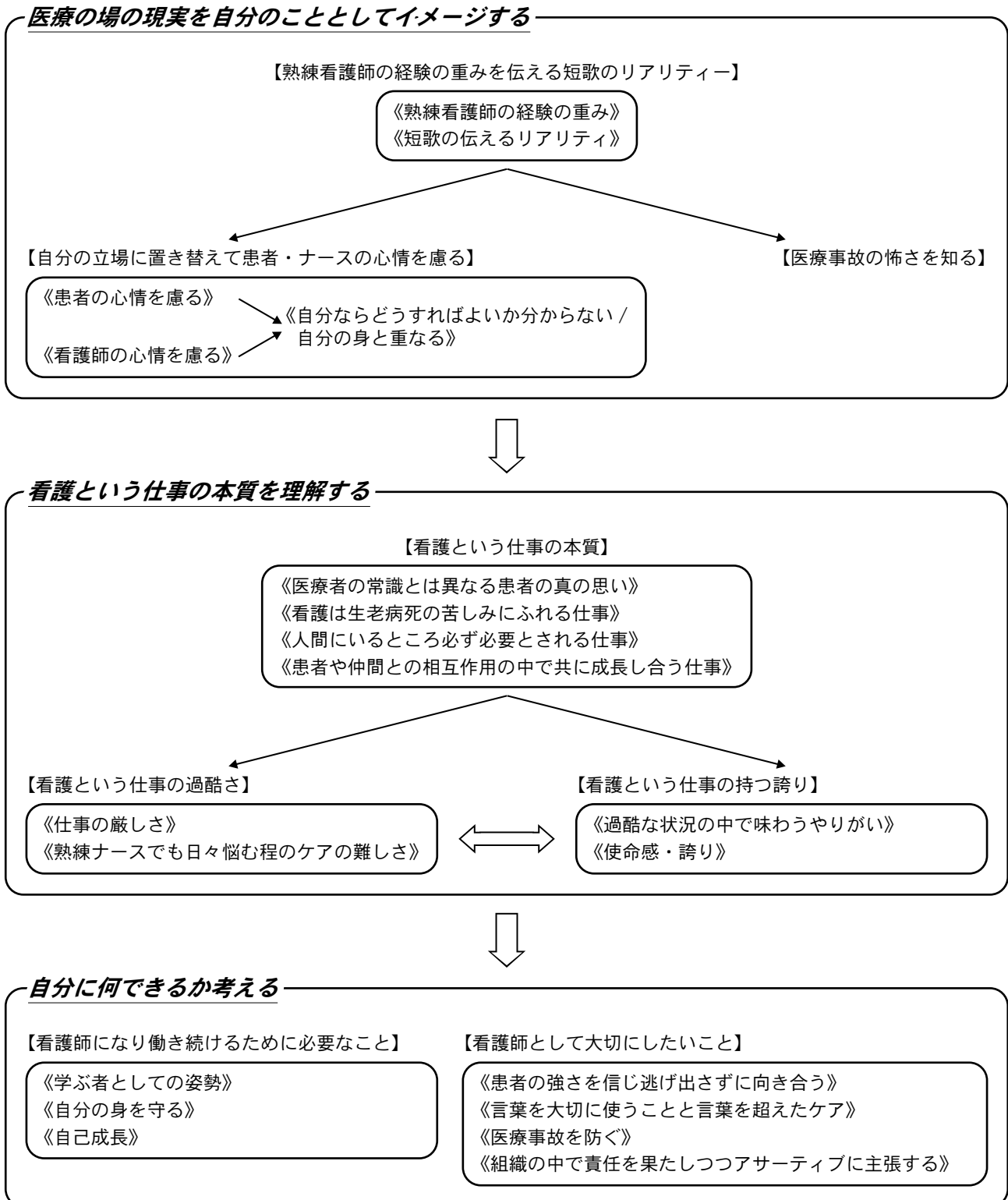


図1 看護実践を詠んだ短歌を用いた授業からの学生の学び

患者の視点から詠んだ歌と聞いて驚いた。患者にとっての夜は、寂しさ、孤独、痛みを感じる長くて辛い時間、少ない人数で安らぎを与えるナースにとっても長い時間。」

《看護は生老病死の苦しみにふれる仕事》には、〈看護は死に関わることを避けられない、死と隣り合わせの仕事〉〈苦しみ傷ついている人の痛みにもふれる仕事〉〈正しい答えのない仕事、数字では評価できない仕事〉〈患者の最も傍にいる仕事、だからこそ看護師自身も悩み苦しむ〉が含まれ、‘患者と共に（# 2・3・4・5・8・27 他）’‘小児病棟（# 18 他）’‘ジレンマと悩みと（# 11 他）’を通して得られ、看護の本質が生老病死に苦しむ人をケアすることにあることに気付くことを示した。レポートの一例：「看護は、人間の生と死に最も深く関わっている仕事、死と隣り合わせの状況の中で、命の大切さが身に沁みて分かる仕事だと思った。」「看護師は、患者と触れ合う時間が一番長いので、それに比例して、患者への思いが多くなる。当然、辛いことや悲しいことが増える。看護の仕事は、患者に向き合うだけでなく、自分自身にも向き合わないといけない仕事だ。」

《人間のいるところ必ず必要とされる仕事》には、〈大晦日でも24時間必要とされる仕事〉〈看護が必要とされるのは万国共通〉〈cureする医師にはできないcareする看護〉が含まれ、‘スタッフと共に（# 34 他）’‘ブルネイ・ダルサラームへ’‘患者と共に（# 26 他）’‘患者として（# 23 他）’を通して得られ、どのような状況下でも、看護は必ず必要とされることに気付くことを示した。レポートの一例：「大晦日に働いているナースの歌をきいて、看護はどんな時でも休みはないのだなあと思った。」「医学がどんなに進歩しても、人の心は人でなければ癒せないと思う。病気を診るのではなく人間を統合体として見る看護に限界はないと思う。」

《患者や仲間との相互作用の中で共に成長し合う仕事》には、〈患者との関わりの中でナースは育てられ、患者は癒されていく〉〈ナースは患者の回復する姿から元気をもらおう〉〈固い絆で結ばれた職場・仲間との絆〉が含まれ、‘スタッフと共に（# 6・20 他）’‘患者と共に（# 7 他）’‘小児病棟（# 18・31 他）’を通して得られ、患者との関係性が絶対的に重要であること、またスタッフとの人間関係が重要であることに気付くことを示した。レポートの一例：「患者をケアするだけでなく、患者から支えられて、看護は成り立つのだと分かった。」「患者と看護師の関係は一方通行ではなく、互いに作用しあって、ナースは育てられ、患者は癒されていく。」「赤ちゃんだった子供が歩いて退院する姿から、看護師は患者が元気になる姿に支えられているのだと思った。」

②【看護という仕事の過酷さ】

これは、《仕事の厳しさ》《熟練ナースでも日々悩む程のケアの難しさ》で構成され、‘ジレンマと悩みと（# 12・14 他）’‘安らぎを（# 28 他）’‘患者として（# 29 他）’‘患者と共に’‘小児病棟’を通して得られ、看護師の仕事

の過酷さが自分の想像を超えたものであると気付くことを示した。レポートの一例：「熟練看護師でさえ、日々、戸惑ったり、どうしたら良いのか分からず模索していることに驚いた。技術は経験の長さで上手くできるようになるが、亡くなる人への精神的ケアは、経験の長さだけでできるようになるものではないと分かった。」『「自虐のごとく」という言葉を聞いて、ぞっとした。それ程、過酷なのかと思った。」

③【看護という仕事の持つ誇り】

これは、《過酷な状況の中で味わうやりがい》《使命感・誇り》で構成され、‘患者と共に（# 7 他）’‘ひたすらに（# 24 他）’を通して得られた。レポートの一例：『「ありがとう」の言葉は、厳しい状態の中で発した患者の精一杯の感謝の言葉。看護師として、これほど嬉しい言葉はない、他では味わえない感動に、心が震えた。嬉し涙と悲し涙が混じり合ったような気持ち。』「生死が近くにあるところで責任を果たしてきた先生の顔が輝いて見えた。仕事に誇りをもっているのが良く分かった。看護は誇りある仕事だということを、心に刻みたい。」

(3) 自分に何ができるか考える

①【看護師になり働き続けるために必要なこと】

これは、《学ぶ者としての姿勢》《自分の身を守る》《自己成長》が含まれた。

《学ぶ者としての姿勢》には、〈患者への感謝〉〈評価をいかに活かすか〉〈看護師になることを心新たに決意〉が含まれ、‘スタッフとともに（# 6・21 他）’‘ひたすらに（# 17・24 他）’を通して得られた。レポートの一例：「自分たちは患者から学ばせてもらっている。実習で出会う患者さんに感謝しないといけない。」「教養科目が続くことや実習がないことに、何を目標として勉強すればよいか目標を見失いそうになっていたが、やっぱり自分は看護師になりたいと、改めて思った。」

《自分の身を守る》には、〈短歌は自分の感情を表現し客観視する方策の一つ〉〈仕事のOn-Offを明確にする〉〈自分の時間をもつ大切さ〉が含まれ、‘安らぎを（# 16 他）’‘ジレンマと悩みと’を通して得られた。レポートの一例：「看護は過酷な世界だからこそ、『一杯のモカコーヒー』の歌のような優雅な時間を持ち、自分で自分をケアする、その方法を豊富にもっていることが大事だと分かった。」「短歌を作ることを通して、先生は、喜び・悲しみ・苦しみなど、心の底にある感情を客観的にみていると思う。自分も、自分の感情を冷静に見つめられる看護師になりたい。」

《自己成長》には、〈辛くても責任を果たす〉〈自己コントロール（心身ともに強靱になる）〉〈死を乗り越える強さ〉が含まれ、‘ひたすらに（# 24・17）’‘ジレンマと悩みと’‘患者と共に’を通して得られた。レポートの一例：「自分に厳しく、精神的に強靱にならないとやっていけない。そのためには、自立（自分で物事をきめること）と自律（自分をコントロールすることが大事）だと思う。」「白衣を着ている間は、どんなに辛いことがあっても、投げ出さずはいけない、やりぬかなければならない。それがプロだと分

かった。」

②【看護師として大切にしたいこと】

これには、《患者の強さを信じ逃げ出さずに向き合う》《言葉を大切に使うことと言葉を越えたケア》《医療事故を防ぐ》《組織の中で責任を果たしつつアサーティブに主張する》が含まれた。

《患者の強さを信じ逃げ出さずに向き合う》は、小児病棟‘患者と共に’を通して得られた。レポートの一例：「小児病棟の子供たちは必死に生きようとしている。告知されて一度は泣いても、決して逃げない。そんな子供たちをかわいそうと思うのではなく、子供の持つ強さを信じてサポートしていきたい。」

《言葉を大切に使うことと言葉を越えたケア》には、〈共にいること〉〈敢えて語らず場を共有すること〉〈ケアの中で時間を大切にすること〉が含まれ、小児病棟‘患者と共に’を通して得られた。レポートの一例：「言葉は生きている。生きている言葉を丁寧に選んで使うようにしなければならない。」「コミュニケーションは看護にとって大事だが、言葉だけがコミュニケーションではない。その場の雰囲気や、間の取り方、無言でいることなど、空間を共有するだけで伝わる何かがあるはずだ。」

《医療事故を防ぐ》には、〈業務ではなく看護することがミスを防ぐ〉〈ミスから何を学ぶか〉〈ミスが起らない環境づくり〉が含まれ、‘医療事故を恐れる’を通して得られた。レポートの一例：「ミスを防ぐためには、一つ一つの行為を業務としてするのではなく、看護としての思いを込めながらしなければいけない」

《組織の中で責任を果たしつつアサーティブに主張する》には、〈組織の中で働くには協調性と責任感が必要〉〈自己の信念をもち諦めずに説得〉が含まれ、‘ジレンマと悩みと（#9他）’を通して得られた。レポートの一例：「医療は一人では何もできない。いろんな職種と協力し合って、組織として動くことが大事。その中で、自分の信念を持ち、最後まで諦めずに説得していきたい。」

考 察

短歌導入による学生の学びは、医療の場の現実を自分のこととしてイメージすることによって、看護という仕事の本質を理解し、そして、自分に何ができるか考えるというものであり、8のカテゴリーで説明できた。本項では、看護基礎教育における教授方法としての短歌の可能性、及び短歌導入による成人看護学の教育効果、について考察する。

1. 看護基礎教育における教授方法としての短歌の可能性

1) 臨床現場のリアリティを鮮明にイメージさせる力

学生は、【熟練看護師の経験の重みを伝える短歌のリアリティー】によって、【自分の立場に置き換えて患者・ナースの心情を慮って】いた。また、感銘を受けた短歌

選の上位には、“患者と共に”小児病棟’の短歌が多く含まれた。学生は、短歌を通して、死を前にした人の苦悩や懸命に生きる姿、患者と看護師の濃厚なふれあい、ケアに伴う看護師の苦悩を追体験している。この結果は、模擬患者を導入した高橋ら¹³⁾の研究結果と一致する。選抜された31文字のことは、臨床現場の真実を明瞭に切り取り表現する歌人の研ぎ澄まされた感性、患者から本心を引き出す熟練看護師の力量が、31文字の短歌に、医療現場を鮮明に再現させる力を与えたと言える。

2) 看護の本質を感覚的・直観的に伝える力

学生は、【看護という仕事の本質】を、《医療者の常識とは異なる患者の真の思い》《看護は生老病死の苦しみにふれる仕事》《人間のいるところ必ず必要とされる仕事》《患者や仲間との相互作用の中で共に成長し合う仕事》と捉えていた。

第1に、《医療者の常識とは異なる患者の真の思い》は、看護では対象を共感的に理解することが重視されるが、苦悩を経験する者の真の思いは同様の体験をした者でなければ理解できないという矛盾を含むこと、及び、看護師はその矛盾を超える努力をしつつも理解できない限界を自覚すること、の重要性を意味する。学生は、他者である患者を真に理解することの困難さ、つまり看護の難しさと限界について理解していると言える。第2に、《看護は生老病死の苦しみにふれる仕事》は、生老病死の苦しみは、あらゆる人間に共通の普遍の苦しみであり、このような苦しみを経験する人間を対象とするのが看護であることを意味する。学生は、ケアの本質が生老病死の苦しみを緩和することにあると理解していると言える。第3に、《人間のいるところ必ず必要とされる仕事》は、生老病死を経験する人間が存在する限り、時空を選ばず必要とされるのが看護であることを意味する。学生は、看護の必要性が普遍的なものであることを理解していると言える。第4に、《患者や仲間との相互作用の中で共に成長し合う仕事》は、患者一看護師関係は、互惠性に基づき、互いの成長を促す双方向の関係、つまり、ケアリングであることを意味する。学生は、看護学における関係性の本質を理解していると言える。

以上、学生は、臨床現場を鮮明にイメージし、当事者の視点から現象を理解することで、看護の本質を4つの視点から理解している。この理解は、看護の本質を的確に把握していると言える。しかし、直観的・感覚的な理解であることから、今後の授業において、理論的裏付けを十分に行う必要がある。

3) 自己の感情を表現し客観視することによるカタルシス効果

学生は、【看護師になり働き続けるために必要なこと】として《自分の身を守る》ことを挙げ、〈短歌は自分の感情を表現し客観視する方策の一つ〉と考えていた。看護師のバーンアウトの原因の一つとして、多くの死を看取ることなど、臨床の場でストレスフルな体験を繰り返

すことが挙げられる。しかし、これらのストレスフルな体験は、公式の場で語られることはほとんどない²⁷⁾。

様々な苦しみの体験を短歌や俳句に託して表現することは、古くは、結核の苦しみを記した正岡子規や、貧困の苦しみを記した石川啄木の存在がある。麻酔科医である外須²⁸⁾は、痛みを短歌や俳句で表現することによって、人は痛みと向き合い対象化し、自らの一部として引き受けると言う。学生を含む看護職にとって、短歌は臨床現場での生々しい看護体験とそれに伴う感情の揺らぎを表現する手段の一つとして有効であり、体験を他者と分かち合うことで、カタルシス効果をもたらすことが期待できる。

2. 短歌導入による成人看護学の学習効果

1) スピリチュアルペインの理解

9の枠組みの内、‘患者と共に’‘小児病棟’で紹介された短歌の多くが、死を意識せざるを得ない重篤な患者・患児を対象とした短歌であった。学生は、これら終末期患者へのケアに関する短歌を通して、【自分の立場に置き換えて患者・ナースの心情を慮る】ことにより、《医療者の常識とは異なる患者の真の思い》《看護は生老病死の苦しみにふれる仕事》を【看護という仕事の本質】と捉えていた。

成人看護学においては、健康レベルに対応したケアの一つとして、人生の最期のときを支える看護について学ぶ(表1参照)。終末期にある人は、身体的・精神的・社会的・霊的苦痛を含む全人的苦痛を経験していると言われる。中でも、人知を超えた大いなる存在(something greater than self)と自己との関係性の中で経験するスピリチュアルペインを緩和することは、死を前にした患者・家族をケアする上で重要かつ難しい問題である。スピリチュアルペインがどのようなものであるかを理解することは、スピリチュアリティーが哲学及び宗教を基盤とする概念であることから、初学者、特に死を意識することの少ない若者にとっては難しい。「死ぬ時はいつ?」と問いかけた患者(#2)は、自らの死を悟り、スピリチュアルペインを経験していたと推測され、また、無言でエレベーターを待つ(#3)・告知していない患者に言葉を選ぶ(#5)で示されるナースの姿は、スピリチュアルペインを経験しているであろう患者の心情を押し量り、言葉を選び、時に無言のまま場と時間を共有する、ただ傍にいたことがケアとなることを示す。学生は、短歌を通して、死を前にした患者と看護師の深い関わりを鮮明にイメージし心情に共感することで、スピリチュアルペインとはどのようなものであるかを、直観的に理解したと言える。

2) 感情労働としての看護の理解

学生は、【看護という仕事の本質】を理解することによって、看護に相反する2つの側面、つまり【看護という仕事の過酷さ】【看護という仕事の持つ誇り】に気づき、《自分の身を守る》ことと《自己成長》を【看護師にな

り働き続けるために必要なこと】と考えていた。

終末期ケアを含む看護は、生老病死に苦しむ人との双方向の関係性の中でケアを提供し、共に高め成長を促しあうケアリングが、患者—看護師関係の基盤になる。病める人の苦悩に共感し、関係性を深める時、時に対象者の苦悩をわが事のように感じ、巻き込まれるという事態が生じる。特に、終末期ケアにおいては、対象者のQOLを最大限に高め、最後までその人らしい生を全うするのを支えることを理念とすることから、その傾向が強まる。看護が感情労働であることを指摘したSmith²⁹⁾によれば、看護師は仕事を通して様々な感情体験をしているが、看護師としての感情規制があるために自己の感情を処理する感情管理を行っている。看護基礎教育においては、患者・家族へのケア方法について体系的に学ぶが、感情労働という特性をもつ仕事を継続していく上で、いかに自分の身を守るのかについての教育は、立ち遅れていると言わざるを得ない。学部の初期段階で、看護が感情労働であることを認識させ、いかに自分の身を守るのか、その方策を考える機会を得ることは、危機的状況にある患者のケアを学ぶ成人看護学の学びとしては、重要と考える。

3) 学習者としての自覚と看護職になる覚悟の促進

学生は、《学ぶ者としての姿勢》《自己成長》を【看護師になり働き続けるために必要なこと】と理解していた。実際に患者を受け持つ臨地実習においては、学生としての甘えは許されず、看護師としての自覚と倫理観、及び知識と技術が求められる。教養教育科目・専門基礎科目が主に配置され、専門科目を学び始めたばかりの1年次の学生に、学ぶ者としての自覚と看護師になることの覚悟を促すことは、その後の授業への取り組みに影響する。近年、高等教育のユニバーサル化により、学生を大学教育に適応させ、中退などの挫折を防ぎ、成功にむけて水路づける過程としての初年時教育の重要性が指摘されており³⁰⁾、この視点からも重要と考えられる。

おわりに

本研究結果より、看護実践を詠んだ短歌は、看護教育において、効果の期待できる教授方法の一つであることが示唆された。本研究の限界は、分析素材としたレポートが、学習課題として提出されたものであり、評価者を意識して書かれた可能性が否めないことである。しかし、効果的な授業を展開するためには、新たな教授方法の試みと評価を繰り返す、教育上のフィードバック機構を活性化し、日々の教育の中でエビデンスを蓄積することが重要と考える。今後は、看護基礎教育における新たな教育方法としての短歌の可能性をより明確にするために、学生の学習段階に応じて、学習効果がどのように異なるのかを明らかにしたいと考えている。

謝 辞

調査にご協力くださいました学生の皆様に感謝します。

文 献

- 1) 小松浩子, 井上智子, 麻原きよみ, 他. “成人看護学総論”, 第12版, 医学書院, 東京, 2009.
- 2) 杉森みど里, 舟島なをみ. “看護教育学”, 第4版増補版, 医学書院, 東京, 212-214, 2009.
- 3) 伊藤登茂子, 煙山昌子, 遠藤まり子. 重症筋無力症患者の闘病記を教材としたグループ学習の効果. 秋田大学医療技術短期大学部紀要 6(1): 93-103, 1998.
- 4) 門林道子, 真部昌子, 小濱優子. 看護学生が闘病記を読む意味について成人看護論での闘病記を用いた授業5年間の報告. 川崎市立看護短期大学紀要 11(1): 13-18, 2006.
- 5) 岡本佐智子, 長谷川真美. 闘病記を教材に用いた回復期看護演習のグループワークに関する検討. 埼玉県立大学紀要 8: 119-124, 2007.
- 6) 上田雅代子. 成人看護学(周手術期)に乳癌患者の体験談を取り入れたことによる学生の学び. 日本看護学教育学会誌. 13(3): 39-46, 2004.
- 7) 古市めぐみ, 堀容子, 滝益栄, 他. 終末期看護における教育方法の検討—肺癌患者による特別講義を導入して—. 日本赤十字愛知短期大学紀要 14: 133-138, 2003.
- 8) 石原由華, 滝益栄, 甲村朋子, 他. 終末期看護における教育方法の検討—終末期患者の体験談聴講後のレポート分析を通して—. 日本赤十字愛知短期大学紀要 15: 53-59, 2004.
- 9) 中沢富枝. 看護教育研究—当事者参加授業の成果慢性疾患をもつ患者の看護に関する教育方法の一考察—. 看護教育 46(5): 406-411, 2005.
- 10) 河部房子, 山本利江, 高橋幸子, 他. 当事者参加を取り入れた看護課程展開の演習の企画・実施報告. 千葉大学看護学部紀要 29: 43-48, 2007.
- 11) 鈴木玲子, 高橋博美, 藤田智恵子, 他. 成人看護学における対象理解を深める教育方法の検討 [1]. 看護展望 28(3): 334-340, 2003.
- 12) 常盤文枝, 鈴木玲子, 高橋博美, 他. 成人看護学における対象理解を深める教育方法の検討 [2]. 看護展望 28(4): 456-461, 2003.
- 13) 高橋奈津子, 庄村雅子, 佐藤幹代, 他. 模擬患者 (SP) を活用した成人看護学慢性期事例演習での学生の学び. 東海大学健康科学部紀要 14: 47-54, 2009.
- 14) 加悦美恵, 河合千恵子. SP (模擬患者) 参加型授業において学生が思い描く患者像の理解. 日本医学看護学教育学会誌 16: 20-26, 2007.
- 15) 関美奈子. がん看護学教育における物語を導入した教育方法 Story-Case learning (SCL) の試み. 日本看護研究学会雑誌 28(5): 87-96, 2005.
- 16) 菊池麻由美. 「身体障害をもって生活する」体験学習で学習されている内容. 聖母女子短期大学紀要 16: 101-108, 2003.
- 17) 磯邊厚子. 成人看護学「運動機能に障害のある患者の看護」の授業実践—患者が本来の生活を取り戻すための体験型授業を試みて—. 看護教育 45(4): 302-307, 2004.
- 18) 福石牧子, 田中初枝, 村田日出子, 他. ターミナルケアの授業方略—学生同士で行うロールプレイを取り入れてみて—. 神奈川県立よこはま看護専門学校紀要 3: 25-31, 2006.
- 19) 浅井美千代, 三枝香代子, 白鳥孝子, 他. 慢性病患者の看護における教育方法の検討. 千葉県立衛生短期大学紀要 24(2): 17-24, 2006.
- 20) 武田美和. 成人看護学演習に学生が作成した患者の導入を試みて—患者像作成による学習効果. 共立女子短期大学看護学科紀要 3: 65-73, 2008.
- 21) 斎藤茂子. 看護学生の死生観の形成—ターミナルケアの授業に遺言状作成を試みて—. 東京都衛生局学会誌 98: 142-143, 1997.
- 22) 佐々木秀美, 山下典子, 松井英俊, 他. 看護学生の自己効力感を高めるための授業のあり方に関する検討—成人看護学概論に学外演習を試みて—. 看護学統合研究 6(2): 8-18, 2005.
- 23) 杉下知子. 学習, “看護学事典”(見藤隆子他総編集), 日本看護協会出版会, 東京, 80, 2005.
- 24) 今井康雄. 「学び」に関する哲学的考察の系譜, “「学び」の認知科学事典”(佐伯胖監修), 大修館書店, 東京, 39-61, 2009.
- 25) 安田壽賀子. “歌集 ナースファイル”, 短歌新聞社, 東京, 2008.
- 26) Strauss A, Corbin J “Basics of Qualitative Research: Techniques and Procedures for Developing Grounded Theory”, 2nd ed., Sage Publications, USA, 1998. [操華子, 森岡崇訳 “質的研究の基礎—グラウンデッドセオリー開発の技法と手順”, 第2版, 医学書院, 東京, 1999.]
- 27) 小宮敬子. 孤立無援感をどう越えるか—「看護と死」を巡る看護師たちの語りを聞いて. 精神看護 7(1): 41-41, 2004.
- 28) 外須美夫. 痛みと文化—日本の短詩型文学から痛みを考える—. ペインクリニック 27(7): 883-889, 2006. 外須美夫. 痛みと文化—日本の短詩型文学から痛みを考える—. ペインクリニック 27(7): 883-889, 2006.
- 29) Smith P. “The Emotional Labour of Nursing”, Macmillan Press, England, 1992. [武井麻子, 前

田泰樹監訳 “感情労働としての看護”, 158-184,
ゆみる出版, 東京, 2001.]

にするための方策—。看護教育 50(5): 376-381,
2009.

30) 山田礼子. 初年時教育とは何か—「生徒」から「学生」

Abstract

Purpose: This study aims at understanding the experience of nursing students who learned by reading tanka (thirty-one syllable verses) that describe the experience of giving nursing care.

Method: A lecture using tanka was given as part of the introduction to adult nursing, a subject for first-year nursing students. The reports submitted by the students regarding the lecture were analyzed qualitatively and inductively. In the lecture, an expert nurse who is also a tanka poet offered explanations and commentary on each of the tanka, which were about the experience of giving nursing care.

Result: Because tanka vividly described the profundity of the work experience of the nurse lecturer, it was not difficult for the students to imagine themselves in the place of the nurse and the patients described in the tanka and to try to understand their feelings. The tanka were also helpful in alerting the students to the dangers of medial accidents. Consequently, the students became aware of the nature, severity and respected aspects of nursing. They considered what they should value as nurses and what they should ensure in pursuing careers in nursing.

Discussion: Tanka used as teaching materials in the basic education of nursing are expected to be effective in a) helping students to vividly visualize clinical care settings, b) having students intuitively understand the nature of nursing, and c) producing a cathartic effect on the nurses, who are given an opportunity to express their feelings and reflect on them objectively. In adult nursing, the use of tanka seems to be effective in having the student a) understand spiritual pain, b) recognize nursing as a job involving emotional labor, and c) recognize responsibility as a nursing student and as a prospective nurse.

受付日 2010年10月12日

受理日 2011年1月6日